

「旧約の信仰者たちの手本」 預言者イザヤとヒゼキヤ王 (11:35~39)

女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。

またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるために会い、また、石で打たれ、試みを受け、**のこぎり**で引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした— 荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

(11:35~39)

■はじめに

1. 手紙の背景と 11 章の内容

- (1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の中でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

2. 前回までの流れ

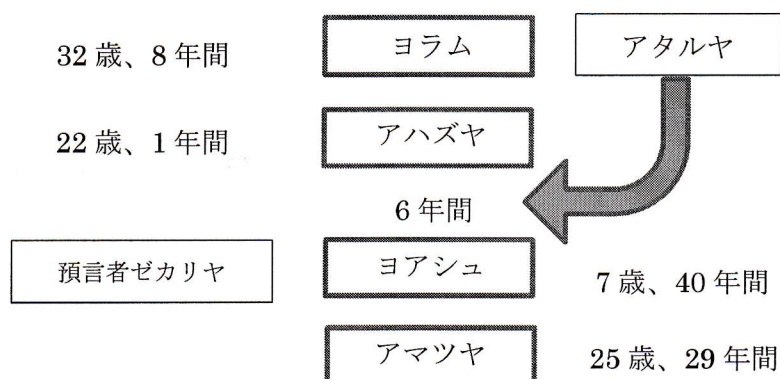
- (1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。
 - ① 二人とも信仰によって「剣の刃をのがれ」た (ヘブル 11:34)。
 - ② 35 節「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました」とあるのは、エリヤ (I 列 17:17~24) とエリシャ (II 列 4:18~37) による事例
 - ③ 37 節「羊ややぎの皮を着て歩き回り」とあるのは、エリヤ (II 列 1:8)
- (2) 本日は、南王国の歴史の 3 回目
- (3) 南王国の第 1 回は、分裂後の 4 人の王を取り上げた。BC930~846

	レハブアム	41 歳、17 年間
	アビヤム	3 年間
最後の 2 年間は病気	アサ	41 年間
治世は 37 歳から 23 年	ヨシャパテ	35 歳、25 年間

その中から、特に三番目のアサと四番目のヨシャパテに焦点をあてた。

- ① アサ王は、「アサの心は一生涯、主と全く同じになっていた」(I 列 15:14)

- アサは、信仰を通して神の恵みにより霊的救いを受けた信者である。
 - しかし、晩年、彼を戒めた預言者を足かせにかけ、民のうちのある者を踏みにじった。その3年後、彼は両足とも病気になり、その病は重かった。
 - ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者をも求めた。発病から2年後に、彼は死んだ。
 - 信者が神の警告を無視して罪を犯し続けると、霊的救いは失わないが、肉体的裁きを受けることがある（ヘブル10:26~27、Iコリ5:5）
- ② ヨシャパテ王は、信仰によって「他国の陣営を陥れた」（ヘブル11:34）。
- ③ しかし、この戦いが起きた原因は、ヨシャパテが誤った方向に行ったことに対する、主の警告であった。誤った方向とは、北王国イスラエルのアハブ王の娘アタルヤを、長男ヨラムの嫁に迎え入れたことである。
- その娘の母親、すなわちアハブの妻は、かのイゼベルである。
 - 娘アタルヤは、バアル崇拜とともに母親の気質もしっかりと受け継いでいたようである。
- ④ 長男ヨラム以降の4代、南王国ユダは暗黒と混乱の時期を迎えることになる。
- (4) 前回、南王国の第2回は、ヨラム以降の4人の王を取り上げた。分裂後では5番目から8番目の王となる。 BC848~767



- ① ヨラムは、主を捨て偶像崇拜に走るとともに、兄弟を皆殺しにした。
- その後、外敵の襲撃を受けて、残った息子はアハズヤだけとなった。
 - 彼自身は内臓の重い病気になって死んだ。
- ② アハズヤは、王となったその年、北で起きた謀反に巻き込まれて死んだ。
- ③ 王母アタルヤは、北の実家が滅亡し、それに巻き込まれて息子アハズヤが死んだと知ると、ただちに、アハズヤの子たちを皆殺しにした。そのとき、赤子ひとりだけ助け出され、6年間神殿にかくまわれた。その子はヨアシュ。
- ④ ヨアシュが7歳のとき、祭司エホヤダが親衛隊とともに立ち、王を自称していたアタルヤを倒して、王権を再びダビデの血筋であるヨアシュに戻した。
- ⑤ ヨアシュは、祭司エホヤダが死んだあと、民のつかさたちの要求を受け入れて偶像崇拜を認めてしまった。主は何人も預言者を遣わして戒めたが、王も民も聞く耳を持たなかった。

- ⑥ 祭司エホヤダの子ゼカリヤが預言者として立って主のことばを語った。民は陰謀により王の命令を引き出し、ゼカリヤを神殿の庭で石打ちにして殺した。37節で「石で打たれ」と言われているのは、このゼカリヤである。
- ⑦ イエスも、このゼカリヤの死について言及した。マタイ 23:35「義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ゼカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血」・・・ゼカリヤのあとも預言者の死は続く。イザヤやエレミヤも。イエスがここで、「アベルからゼカリヤまで」というのは、ヘブル語の旧約聖書の順序による。アベルは最初の巻・創世記、ゼカリヤは最後の巻・諸書の歴代誌に記録されていた。よって、イエスの言及は、旧約聖書が記録するすべての預言者たちの犠牲を指している。
- ⑧ ゼカリヤが殺されたあと、アラムの少人数の軍勢によって南王国ユダは襲撃されて敗れ、ヨアシュはその責任を問われて裁判にかけられた。そのとき、すでにヨアシュは病床にあった。彼は病床で家来により殺された。
- ⑨ 8番目のアマツヤは25歳で王となった。エドムとの戦いで1度勝ったことにおごり、29歳のとき、北のイスラエル王国に戦いを挑むも敗れ、捕虜になってしまった。このとき、その子アザルヤ16歳が代理王となるが、北イスラエルはアマツヤを王位に戻した。それから25年後、エルサレムの人々が謀反を起し、逃げるアマツヤ54歳を追走、ラキシユで彼を殺した。

3. 今回の内容

- (1) 本日は、アザルヤ【別名ウジャ】、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの4人の王を取り上げる。分裂後では9番目から12番目の王となる。暗黒と混乱の時期を脱して国力が回復、信仰をもった王ヒゼキヤが出る。
- (2) この4人の王の時代に活動した預言者が、イザヤである(イザヤ1:1)。
- ① 預言者としての召命は、「ウジャ王が死んだ年」(イザヤ6:1)、よって紀元前740年。4人目の王ヒゼキヤが死んだのは紀元前686年。
- ② よって、イザヤの活動期間は54年まさに、忍耐の年月である。
- ③ 伝承では、イザヤは12番目の王ヒゼキヤの次、13番目の王マナセによって「のこぎりで引かれ」(37節)た。イザヤがマナセ王のときに活動したとは記されていないので、イザヤの死は、ヒゼキヤ王が亡くなってすぐ、紀元前686年頃であると推定される。

■南王国の9番目から12番目の王たち (BC792~690頃) 4代 約100年

□アザルヤ【ウジャ】(16歳、52年間) BC792(16歳)~767(41歳)~740(68歳)

1. 略歴をⅡ列15:1~7に見る

- (1) 1節「イスラエルの王ヤロブアムⅡの第27年」、紀元前767年。アザルヤは41歳で、代理王の立場から単独王となった。よって単独での治世は、27年間。
- (2) 3節「彼はすべて父アマツヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った」
- (3) 5節「主が王を打たれたので、彼は死ぬ日までツアラアトに冒された者となり、隔ての家に住んだ」、「王の子ヨタムが宮殿を管理し、この国の人々をさばっていた」

(4) Ⅱ列 15:32 アザルヤは別名「ウジヤ」

☐アザルヤ=主は助けた、☐ウジヤ=主は私の力

2. アザルヤは、なぜ主に打たれたのか？詳しい記事が、Ⅱ歴 26 章。こちらでは「ウジヤ」

(1) Ⅱ歴 26:5 ゼカリヤという人物が王に神を認めることを教えた。ゼカリヤが存命中は神を求めた。彼が主を求めていた間は、神は彼を栄えさせた。

① Ⅱ歴 26:6~8 戦場での勝利

② Ⅱ歴 26:9~10 土木工事、治水、農業振興

③ Ⅱ歴 26:11~14 量・質ともに強力な戦闘部隊

④ Ⅱ歴 26:14~15 戦士たちへの武具供給、巧みに考案された兵器の製造配備

(2) Ⅱ歴 26:16~20

① しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、主に対して不信の罪を犯した。

② 彼は香の祭壇の上で香をたこうとして主の神殿に入った。すると、彼のあとから、祭司アザルヤが、主に仕える 80 人の有力な祭司たちとともに入って来た。

「ウジヤよ。主に香をたくのはあなたのすることではありません。香をたくのは、聖別された祭司たち、アロンの子らのすることです。聖所から出てください。あなたは不信の罪を犯したのです。あなたには神である主の誉れは与えられません。」

③ ウジヤは激しく怒って、手に香炉を取って香をたこうとした。彼が祭司たちに対して激しい怒りをいただいたとき、その祭司たちの前、主の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額にツアラアトが現れた。

④ そこで彼らは急いで彼をそこから連れ出した。彼も自分から急いで出て行った。主が彼を打たれたからである。

(3) Ⅱ歴 26:21 主が打たれたので、彼は死ぬ日までツアラアトに冒された者となり、隔ての家に住んだ。王の子ヨタムが宮殿を管理し、この国の人々をさばっていた。

(4) ウジヤが主に打たれ、王の子ヨタムが代理王となったのは、いつか？

① Ⅱ列 15:32 に、ヨタムが王となったのは「ペカの第 2 年」とある。この年は、紀元前 750 年、ウジヤは 58 歳である。

② ウジヤは 68 歳で死んだ。10 年間、隔ての家にいたことになる。

□ヨタム (25歳、16年間) BC750 (21歳) ~746 (25歳) ~731 (41歳)

1. 略歴をⅡ列 15:32~38に見る

- (1) 32節 「イスラエルの王ペカの第2年」=紀元前750年。ヨタムは21歳。
- (2) 33節 25歳で王となり、エルサレムで16年間、王であった。
- (3) 34~35節 彼はすべて父ウジヤが行ったとおり、主の目にかなうことを行った。民はなおも高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。
 - ① Ⅱ歴 27:1 彼はすべて、主の目にかなうことを行った。父ウジヤが行ったとおりである。ただし、彼は、主の神殿に入るようなことはしなかった。
 - ② Ⅱ歴 27:1 民はなお滅びに向かっていた。
- (4) Ⅱ列 15:37 「そのころ、主は、アラムの王レツインと北イスラエルの王ペカをユダに送って、これを攻め始めておられた。」
- (5) Ⅱ歴 27:3~6
 - ① 主の宮に上の門を建てた。オフエルの城壁上に多くのものを建てた。
 - ② ユダの山地に町々を建てた。森林地帯には城塞とやぐらを築いた。
 - ③ アモン人の王と戦い、打ち勝った。
 - ④ このように勢力を増し加えた。彼が、彼の神、主の前に、自分の道を確認したからである。

2. ヨタムは、信仰者であったか？

- (1) 彼の王としてのスタイルは、彼の父ウジヤに似ている。その実績は父ほどではないとしても、偶像崇拜には走らず、王としての職責を忠実に果たした。
- (2) 主は、約束の地における当時のイスラエル民族に対し、その行いに応じて「祝福とろい」を置かれた。これは、「霊的な救い」とは別のことである。霊的な救いは、行いではなく、信仰を通して受け取るものである。信仰者は、「イスラエルの残れる者」(レムナント)と呼ばれる。イスラエルの中のわずかな者たちである。
- (3) ヨタム王は、確かに「主の前に、自分の道を確認した」。しかし、指導者として民の背教を正すことまではしなかった。「民はなお滅びに向かっていた」とあるとおりである。
- (4) 「そのころ、主は、アラムの王レツインと北イスラエルの王ペカをユダに送って、これを攻め始めておられた。」・・・主のさばきは、急には来ない。主は事前に預言者を遣わし、外敵を起こして警告を発する。アラムの王と北イスラエルの王による南王国ユダへの攻撃は、ヨタムの次の世代に本格化する。

□アハズ (20歳、16年間) BC742 (9歳) ~735 (16歳) ~731 (20歳) ~715 (36歳)

1. 略歴をⅡ列 16:1~5に見る

- (1) 1節「イスラエルの王ペカの第17年」、これは紀元前735年である。
- (2) 関係箇所(Ⅱ列 15:30、32、33、16:1、2、17:1)を総合すると、
 - ① 紀元前742年、アハズが9歳のときに、父ヨタム王と共同王になった(北イスラエルの王がペカからホセアに代わるのは、Ⅱ列 15:30により紀元前731年。その年は、Ⅱ列 17:1により「アハズの第12年」であることから判明)
 - ② 紀元前735年、16歳のとき、アハズが、共同王であることが再確認された。Ⅱ列 16:1は、これである。
 - ③ 紀元前731年、20歳のとき、父ヨタム王が死去、アハズが単独王となった。このときから数えると、その治世は16年間。Ⅱ列 16:2は、これである。
- (3) 2~4節 彼はその父祖ダビデとは違って、主の目にかなうことを行わず、イスラエルの王たちの道に歩み、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもに火の中をくぐらせることまでした。さらに彼は、高き所、丘の上、青々と茂った木の下で、いけにえをささげ、香をたいた。
 - ① バアルのために鋳物の像を造った(Ⅱ歴 28:2)
 - ② その場所は、ベン・ヒノムの谷(Ⅱ歴 28:3)
 - ゲイ・ヒノムともいう。新約聖書にでてくる^ギゲヘナの語源
 - 「生きたまま人を火で焼く場所」を連想させるので、ゲヘナとは永遠の滅びの場所を指す用語となった。別名「火の池」である。
- (4) 5節 このとき、アラムの王レツィンと、イスラエルの王ペカが、エルサレムに戦いに上って来て、アハズを包囲したが、戦いに勝つことはできなかった。

2. この戦いについて、Ⅱ歴 28章が詳しく記録している。

- (1) 主はアハズを、アラムの王の手に渡された(Ⅱ歴 28:5)
- (2) イスラエルの王の手にも渡された(Ⅱ歴 28:5~15)
- (3) 「戦いに勝つことはできなかった」=エルサレム陥落まではできなかった
- (4) イザヤ書7章に、より詳しい背景が記録されている。
 - ① イザヤ 7:1 エルサレムの包囲は解かれて、アラム軍もイスラエル軍も引いた。当時の戦いは、冬はしない。おそらく冬に入ったので、軍はいったん引いたのであろう。
 - ② イザヤ 7:2 しかし、「エフライムにアラムがとどまった」。アラム軍が本国まで帰らず、北イスラエルのエフライムの山地で越冬のための宿営をしているとの知らせが入った。これは、春になったら、またエルサレムに攻めてくるという兆候である。アハズ王の心も民の心も、「林の木々が風で揺らぐように動揺した。」
 - ③ イザヤ 7:3~25 ここで、預言者イザヤがアハズ王に主のことばを伝える。この中には重要なメシア預言なども含まれるが、本日はこの戦いの部分に限定して扱う。
 - ④ イザヤ 7:6、アラムの王レツィンとイスラエルの王ペカの目的は、ダビデの

家系の王家を廃絶して、他の者を王とすることにあつた。これは、ダビデの家系からメシアを出すという神の約束に触れるものである。彼らは越えてはならない一線を越えてしまった。そのために、主のむちは、次はアラムとイスラエルの上に振りおろされる。彼らは、他国の王の手に渡されることになる。

- ⑤ その他国の王とは、アッシリヤの王である。→ イザヤ 7:15~17、イザヤの子がまだ幼いうちに、すなわち近い将来、アラムと北イスラエルは没落する。
3. このように、アハズ王は、預言者イザヤから主の計画を知らされ、「気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはいけません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし、すなわちレツィンすなわちアラム (の王) とレマルヤの子 (北イスラエルの王ペカ) との燃える怒りに、心を弱らせてはなりません」と励まされた。
 4. それに対して、アハズ王は、どのように行動したのか。Ⅱ列 16:7~20 から見る。
 - (1) 7~9 節 アハズは、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルに使者を遣わし、「私はあなたのしもべであり、あなたの子です」=アッシリヤの属国となるので、アラムとイスラエルの攻撃から救ってほしいと要請した。アハズは主の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出し、それを贈り物としたので、アッシリヤの王は彼の願いを聞き入れた。そこで、アッシリヤの王はダマスコを攻撃してこれを取り、その住民をキルへ捕らえ移し、アラムの王レツィンを殺した。
 - (2) 10~16 節 アハズは、ダマスコに出向き、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルと会った。そのとき、ダマスコにある祭壇の図面と模型を入手して、エルサレムの祭司ウリヤに送った。祭司ウリヤはアハズが帰るまでに、そっくりの祭壇を主の神殿の前に築いた。元からあつた青銅の祭壇は、本来の位置から移動して、新しい祭壇の北側に据えた (つまり、主の神殿の前から外した)。アハズは、犠牲をささげるときは新しい祭壇を使うこと、元の青銅の祭壇はアハズ王が伺いを立てるために使うと命じ、祭司ウリヤはその通りにした。
 - (3) 18 節 宮の中に造られていた安息日用のおおいのある道、外側の王の出入り口、こういった部分を「アッシリヤの王のために主の宮から取り除いた」。それまでは神殿域の一部であつた出入り口や道を、改造して神殿域から外すことで、異邦人であるアッシリヤの王が通れるようにした。アッシリヤの王がエルサレムに来たときに備えて、神殿の前に置かれているアッシリヤ様式の祭壇の前までアッシリヤ王を案内することができるようにしたものと推定される。
 5. アハズがここまでして、アッシリヤの傘下に入ろうとしたのは、成功したのか? → 逆にアッシリヤの攻撃を受けるようになった (Ⅱ歴 28:16~21)
 6. 失敗であつたことが明らかとなつて、どうしたのか? → 不信の罪 (Ⅱ歴 28:22~25)

□ヒゼキヤ (25歳、29年間) BC729~716~714 (25歳)~701 (第14年) ~686 (53歳)

1. 略歴をⅡ列 18:1~8に見る

- (1) 1節「イスラエルの王ホセアの第3年」、これは紀元前729年。父アハズはこのとき、まだ健在で22歳。ヒゼキヤ10歳は父アハズとともに共同王となった。
- (2) 通常なら、父アハズが死んだ紀元前716年に単独王となり、そこからヒゼキヤの治世がカウントされる。しかし、彼の第14年に起きるアッシリヤの侵攻は紀元前701年である。よって、彼の治世開始は紀元前714年である。2年間のブランク
- (3) 2節「25歳で王となり、29年間、王であった」・・・ヒゼキヤの死は、治世第14年から15年後(Ⅱ列20:6)である。BC686
- (4) 3節 彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った。
 - ① 4節 彼は高き所を取り除いた。石の柱を打ちこわした。アシェラ像を切り倒した。
 - ② 4節 モーセの作った青銅の蛇を打ち砕いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた。
 - 民21:4~9
 - ③ 5節 彼はイスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった。
 - ④ 6節 彼は主に堅くすがって離れることがなかった。
 - ⑤ 7節 主は彼とともにおられた。

2. ヒゼキヤがどのように主に仕えたか。Ⅱ歴29:3~30:27の記事をまとめると・・・

- (1) 治世第1年第1の月に、主の宮の戸を開き、これを修理した。さらに、祭司とレビ人を集め、自分自身を聖別し、主の宮を聖別するよう命じ、実行させた。
 - ① 父アハズが「主の宮の戸を閉じた」(Ⅱ歴28:24)
 - ② 「彼らは(神殿の)玄関の戸を閉じ、ともしびの火を消し、聖所でイスラエルの神に香をたかず、・・・」(Ⅱ歴29:7)
- (2) 全イスラエルとユダに使いを遣わし、エフライム族とマナセ族に手紙を書いて、エルサレムに来て、主に過越のいけにえをささげるよう呼びかけた。身を聖別した祭司たちが十分な数に達していなかったので、第二の月に行くこととした。
- (3) エルサレムに大きな喜びがあった。ソロモンの時代からこのかた、こうしたことはエルサレムになかった。

3. Ⅱ列18:9~12、北のイスラエルがアッシリヤにより滅んだ。

- (1) 10節 「ヒゼキヤの第6年、イスラエルの王ホセアの第9年」、共同王となった時から第6年、アッシリヤ王シャヌマヌエセルによりサマリヤ陥落 BC723

4. Ⅱ列18:13~19:37をまとめると・・・

- (1) 13節 「ヒゼキヤの第14年」、治世開始から第14年、アッシリヤ王セナケリブがユダを攻撃。BC701。
- (2) 13節 「アッシリヤの王セナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々を攻めて、これを取った」 このときのアッシリヤ軍は、先遣隊と本隊の二手に分かれてエルサレムに攻めて来た。
 - ① 先遣隊は、カルメル山の東からイズレエル平野へ入り、そこから南下して、サ

マリヤを抜け、エルサレムの北の町、ノブまで来た。先遣隊がカルメル山まで来た時点ですでに、ヨルダン川東側のアモン、モアブ、エドムといった諸国は、ユダを支持することをやめ、アッシリヤに服従した。アッシリヤ軍がノブまで来ることは、イザヤが預言していた（イザヤ 10:28~32）。

- ② 本隊は、カルメル山から地中海沿いに南下して、現在のテル・アヴィブの地域に進軍した。ベテ・ダゴン、ヨッパ、アツオル、アフエクといった町々を制圧した。ヒゼキヤの要請を受けてエジプトは援軍を送り、ガザ、アシュケロンを通して、エルテケまで北上してきて、アッシリヤの本隊と戦ったが、エジプト軍は敗れて撤退した。
- ③ アッシリヤの本隊は、ティムナ、エクロンを制圧して、次にラキシユを攻撃するために、王の本営をラキシユに置いた。
- (3) 14~17節 ヒゼキヤはラキシユに本営を置いたアッシリヤの王のもとに使者を送り、講和を求めた。アッシリヤの王は莫大な金銀を要求。ヒゼキヤがあるだけの金銀を差し出したが、要求された量には足らなかった。アッシリヤの王は配下の将軍たちに大軍をつけてエルサレムに向かわせた。ここに記された将軍たちの名は、個人名ではなく、アッシリヤ軍の中での階級を示す称号である。
- ① タルタン（アッシリヤ軍の最高級将校の呼称、「最高司令官」の意味）
- ② ラブ・シャケ（アッシリヤの高官の称号、ラブはアッカド語で「首長」・シャケーは「飲ませる」）
- ③ ラブ・サリス（同じく軍の称号、サリスはアッカド語で「かしら」）
- (4) 17節 タルタンたちが率いるアッシリヤ軍（以下、「別動隊」）は、「布さらしの野への大路にある上の池の水道のそば」に来た。これはエルサレム城外の東側である。籠城側にも攻撃側にも必要な水源を確保する上で、重要な場所であった。別動隊はいち早く、ここを占拠してユダを威嚇しようとした。この動きは、籠城側も予測していた（Ⅱ歴 32:2~8）。
- (5) エルサレムの北側には、すでにアッシリヤの先遣隊がノブまで来ている。エルサレムは北と東と主要な交通路を遮断され、包囲された。
- (6) 18~36節 アッシリヤ別動隊の高官のうち、ラブ・シャケはヘブル語を話し、ユダの国情に通じていた。彼はヒゼキヤ王がより頼んでいる神を侮辱した。
- (7) Ⅱ列 19:1~7 イザヤの預言「あなたが聞いたあのことば、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒瀆したあのことばを恐れるな。今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す」（Ⅱ列 19:6~7）
- (8) 8節 王の本隊はラキシユから移動してリブナを攻撃していた。ラブ・シャケはエルサレムを包囲する別動隊から離れて王の本隊に合流。
- (9) 9節~13節 このときクシュ（エチオピア）の軍が攻めてくるとの知らせを受ける。アッシリヤ王はクシュの横やりが入る前に、ヒゼキヤを脅して降伏を急がせようとした。王は再び使者たちをヒゼキヤに遣わし、ヒゼキヤがより頼む神を侮辱する手紙を送った。
- (10) 14~34節 ヒゼキヤはその手紙を読み、主の宮に上って行って、それを主の前で

広げた。ヒゼキヤは祈り、預言者イザヤは人をやって預言を伝えた。

(11) 35 節 その夜、**主の使い**が出て行って、アッシリヤの陣営で、18万5千人を打ち殺した。

- II 歴 32:21 主は**ひとりの御使い**を遣わし、アッシリヤの王の陣営にいたすべての**勇士、隊長、首長を全滅させた**。そこで彼は恥じて国へ帰り、彼の神の宮に入ったが、自分の身から出た子どもたちが、その所で、彼を剣にかけて殺した。

(12) 36~37 節 アッシリヤの王セナケリブは立ち去り、ニネベへ帰った。彼がその神ニスロクの宮で拜んでいたとき、彼の子のうちの二人が剣で彼を打ち殺し、アララテの地へ逃げた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

- セナケリブの在位期間は BC704~681。アッシリヤ側の戦記は「エルサレムに籠城したヒゼキヤを籠の中の鳥のように閉じ込めた」

5. II 列 20:1~11 そのころ (紀元前 701 年)、ヒゼキヤは病気になって死にかかった。預言者イザヤを通して「あなたの寿命にもう 15 年を加える」。BC686、ヒゼキヤは 53 歳で死去。

(1) 病気になってから死ぬまで 15 年である。彼の治世は 29 年、アッシリヤ軍の侵攻があったのは第 14 年、よって、病気になったのは、まさに、アッシリヤ軍の包囲を受け、主に堅くすがり、祈りによって (II 列 19:14~19) 救われた年、ヒゼキヤ 38 歳であった。

(2) なぜ、ヒゼキヤは病気になったのか? おそらくヒゼキヤの高ぶりである (参考 II 歴 32:22~24)。彼が癒されたのちも、ヒゼキヤは主の訓練を受ける。

6. II 列 20:12~21 そのころ、バビロンの王が使者を遣わし、ヒゼキヤに贈り物をした。

→ イザヤによる預言「アッシリヤではなく、このバビロンから攻撃を受ける」

(1) ヒゼキヤの思い 「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は、平和で安全ではなかろうか、と思ったからである。(19 節)

(2) 彼がバビロンの使者たちに都中を見せびらかしたのは、やはり彼のうちに自慢する気持ちがあったからである。II 歴 32:31 「神は彼を試みて、その心にあることをことごとく知るために彼を捨て置かれた」。

(3) II 歴 32:25~26 このあと、彼は、病気からいやしてくださった主の恵みにしたがって主に報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。指導者の罪は、国民にも及ぶ。御怒りが、彼の上に、そして国民の上を下ろうとした。あらためてヒゼキヤと民が、その心の高ぶりを捨ててへりくだったので、主の怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった。神の試みは、信者を謙遜へと導く。